HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	吉田松陰の経世論
Author(s)	武石, 智典
Citation	研究論集, 13, 359(左)-384(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/54079
Type	bulletin (article)
File Information	020_TAKEISHI.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

吉田松陰の経世論

武　石　智　典

要　旨

吉田松陰（1930～1959）は，江戸末期の長州藩士であり，思想家，教育者として知られている。吉田松陰は明治から現代に至るまで人気が高く評価の高低は別として，注目されてきた人物である。松陰に関する先行研究は，様々な時代ごとの背景や世論に左右されてきた。松陰に対する評価は，昭和二十年の八月十五日の敗戦以前と以後で大きく分けることができる。端的に言えば，戦前の松陰像は「憂国の忠臣」であり，戦後は「人道主義の教育者」として評価されてきた。つまり，松陰の多角的な事績から時代ごとの背景や世論に合わせて松陰像が築かれてきた。戦前といっても明治，大正，昭和では松陰像が異なる。また，戦前の松陰像に対する反動から新たな松陰像が築かれた。更に，研究者の基盤となる学問領域を軸としての松陰像を形成されてきたというのも戦後の松陰像の特徴である。更に，松陰の「草莽崛起論」に対する解釈や「水戸学」との距離感，亦は「雄略論」における対外姿勢や松陰の攘夷の定義といった先行研究においても解釈が分かれる問題がある。

本稿は，吉田松陰の忠誠観と対外認識及び政策に着目し，時代区分に沿って松陰の思想の変遷を明らかにするものである。また，先行研究で解釈が分かれる「草莽崛起論」に対する解釈や「水戸学」との距離感，亦は「雄略論」における対外姿勢や松陰の攘夷の定義といった問題に対して，新たな考察を試みた。

結論として，松陰の忠誠は，最終的には天皇と朝廷，藩主と藩を分離し，天皇―藩主―松陰（草莽）といった構造を築く。また，対外認識及び政策を巡っては，松陰が攘夷を求めた理由は，松陰が，一貫して華夷秩序に則して西洋列強を外夷と見なし，日本の独立を脅かす脅威として認識していたことにある。また当初の近隣国に対し武力進出を主張した当初の「雄略論」から後に交易により国を豊かにするとした「雄略論」へと変化していることを明らかにした。

はじめに

吉田松陰（1930～1959）は，江戸末期の長州藩士であり，思想家，教育者として知られている。吉田松陰は明治から現代に至るまで人気が高く評価の高低は別として，注目されてきた人物である。松陰に関する先行研究は，様々な時代ごとの背景や世論に左右されてきた。松陰に対する評価は，昭和二十年の八月十五日の敗戦以前と以後で大きく分けることができる。端的に言えば，戦前の松陰像は「憂国の忠臣」であり，戦後は「人道主義の教育者」として評価されてきた。つまり，松陰の多角的な事績から時代ごとの背景や世論に合わせて松陰像が築かれてきた。戦前といっても明治，大正，昭和では松陰像が異なる。また，戦前の松陰像に対する反動から新たな松陰像が築かれた。更に，研究者の基盤となる学問領域を軸としての松陰像を形成されてきたというのも戦後の松陰像の特徴である。更に，松陰の「草莽崛起論」に対する解釈や「水戸学」との距離感，亦は「雄略論」における対外姿勢や松陰の攘夷の定義といった先行研究においても解釈が分かれる問題がある。

本稿は，吉田松陰の忠誠観と対外認識及び政策に着目し，時代区分に沿って松陰の思想の変遷を明らかにするものである。また，先行研究で解釈が分かれる「草莽崛起論」に対する解釈や「水戸学」との距離感，亦は「雄略論」における対外姿勢や松陰の攘夷の定義といった問題に対して，新たな考察を試みた。

松陰に関する先行研究は多い。ここではまず本稿で問題とする忠誠観と対外認識及び政策に関する先行研究を見ておきたい。

⑴　松陰の忠誠観について

松陰は江戸時代後期の長州藩士である。もちろん松陰の忠誠観の構造の中には，天皇も幕府も藩も組み込まれている。しかし，松陰は，自らの思想を形成していく過程で，天皇―幕府―藩という忠誠観の構造を変化させていく。本郷隆盛氏は，「京都に忠であれば幕府・諸侯に対してもおのずと忠義になるのだという論理を展開している。このように，天皇への忠と藩主への忠をほとんど同一の線上にとらえていることのほうが多いのであり，これは松陰の場合にもまったく同様なのである。」(注一) としている。これによれば，京都（天皇）に忠義であれば，幕府・諸侯にたいしてもおのずと忠義であるという松陰の忠誠観は当時の一般的忠誠観に基づいたものであり，本郷氏は，松陰の忠誠観に独自性は認められないものとしている。これに対し，高橋文博氏は，「松陰は，皇国日本を支える営為としての「勤王」や「忠義」の意味が一義的ではあり得ず，例えば真の勤王と偽の勤王という対立のあることを意識していた。彼は，皇国と臣民の理念の提示は，それだけで理念の提示者の正当性を保証するものではなく，理念はその具体化された現実において，理念としての検証を促されるという事情に逢着していたのである。」(注二) とし，松陰の「勤王」や「忠義」というものは，理念の提示のみでは意味をなさず，理

念を具体化しなければ意味をなさないと松陰は考えたとしている。これは，自己の忠誠観の独自性を松陰自身が認識し，真の勤王と偽の勤王という対立の上で松陰は，現実性を理念に求めたとしている。

松陰の幕府に対する忠誠観について，海原徹氏は，「藩主には懸命に諫めて聞き入れられなければ，諫死するまでであると，ほとんど無限の忠誠心を示すが，幕府に対しては，国政を担う大任の将軍には二百年来の恩義があるから，三諫も九諫も繰り返すが，盡しても盡してもどうしてもその罪を認めないときは，止むを得ない。志を同じくする諸大名と協力して朝廷にこのことを奏請し，勅旨を体して事を起こすつもりであるというように，前後のニュアンスがかなり異なる。」(注三) とし，松陰の忠誠観について，幕府に対する忠誠と天皇及び藩主毛利敬親に対する忠誠が異なっているとしている。これに対して，桐原健真氏は，「水戸学的尊王論から国学的尊王論への「転回」であり，また両者の尊王論の根本的な相違が日本の存在理由の根拠の相違に由来するものであったことを明らかにしてきた。「転回」後の松陰は，日本固有の君主としての天皇を，「皇国の皇国たる所以」── 日本の存在理由 ── であると思い定めるに至った。そしてその立場から，現実の秩序である幕藩体制それ自体こそが天皇の存在を ── そして同時に日本の独立を ── 阻害しているとみなすようになり，次の時代を切り拓く力強い一つを形成していったのである。」(注四) とし，幕府と藩を切り離さず，藩主毛利敬親さえも天皇に対する忠誠においては，阻害する存在としている。

以上のように松陰の忠誠観に対する先行研究では，松陰の忠誠観の独自性及び天皇―幕府―藩といった当時の忠誠観の構造に対し松陰がどのような認識を抱いたかが主な問題点としてあった。また，松陰の忠誠観の構造は，更に「草莽」が加わることで変化していく。

(2) 松陰の対外認識及び政策について

郭連友氏は，松陰の対外認識について「ペリー来航によって象徴される外国勢力の接近は兵学者出身の青年松陰にとって常に危機と危険を意識せざるをえなかった。度重なる西洋諸国のアジアへの窺覦，イギリスの侵略によって引き起こされたアヘン戦争での中国側の敗北などは松陰の眼に日本の「外患」として映り，それに対応する策もなく，上下狼狽して為すすべを知らない幕府の無能や国内政治の危機があたかも「内憂」として松陰を憂慮させる。当時日本の置かれた国際環境や国内状況は思想家に深刻な思考や応急対策の提出を要求する。」(注五) としている。松陰の対外認識としては，脅威として西洋諸国が存在し，「外患」である西洋の脅威に対し幕府が十分には対処できないために，新たに「内憂」が生まれたとしている。つまり松陰の認識としては，西洋諸国は脅威でしかなかったとしている。これに対して，海原徹氏は，「日米和親条約を，外夷の居丈高な態度にわが国は為す術もなく恐れ戦き，言われるままに開国してしまったと酷評したように，松陰は今度の開国を外からの脅威，すなわちペリーの圧倒的な軍事力を背景にした城下の盟であると見る。こうしたいわゆる砲艦外交は，わが国にとって恥辱

以外の何ものでもなく，絶対に認められないと考える松陰は，この恥辱を雪ぐための武力行使を容認する。大いに打ち懲らしめなければ，国威を示すことができないという観点から，民族的な独立のため，たとえ勝利が覚束なく国中が焦土と化すことがあっても，このさい夷狄と戦火を交えることを止むを得ないのではないかと考えたのである。いわば条件づきの攘夷論であり，未来永久に国を閉ざして一切外国と交際を絶つなどと主張しているのではない。それどころか，近い将来に開国を予定した一時的な攘夷の主張であり，その意味では攘夷的開国論ということもできるだろう。」(注六) と述べている。松陰が問題としているのは，西洋の圧倒的な砲艦外交に屈したことであり，対等な関係の上での開国は容認しているとするものである。この論と同様に，列強による砲艦外交を問題としているのが，桐原健真氏である。桐原健真氏は，「松陰の「攘夷」は，もはや相手が「外夷」であるからという教条的な華夷名分論に基礎づけられたものではなかった。その強圧的な交渉態度が，国家間の対等（「礼」）を損っている（「無礼」）ことを糾弾すべく主張されたものであり，この対等の観念こそ，彼を当時の攘夷論の大勢から大きく異ならしめているものであった。(中略)独立国としての日本が，同様に独立国である諸国家に対して対等の関係であるべきことを主張したのであり，それは日本をもって中華とみなすような独善的な華夷意識からの決別を意味していた。」(注七) と述べている。つまり，松陰は「攘夷」を，対外認識において水戸学や国学における，日本を中華とみなし列強を「外夷」とみなすような華夷名分論とは異なるとしている。松陰が問題視したのは，列強の強圧的な交渉態度にあったとしている。

この列強による砲艦外交に見られる強圧的な交渉態度に憤って，松陰は「攘夷」を主張したという説に対して，本郷隆盛氏は，「松陰の思想形成の原動力は侵掠の機会を窺うと考えられた西洋諸国に対する強い敵愾心と対抗意識であり，それに対抗するためには，西洋や中国とは異なるわが国の国家としての独自性とそれが守るべき価値を具有しているゆえんとを明らかにし，かつそれをおのれの内面的主体性の窮極の拠り所とすることが不可欠な手続きであった。」(注八) と述べている。松陰は，侵掠の機会を窺う西洋諸国に対して敵愾心と対抗意識を抱き，に対抗するには，独自性とそれが守るべき価値を求めたとし，西洋の侵掠をより現実な脅威として認識したとしている。このように松陰の対外認識をめぐっては意見が分かれている。

松陰の対外認識及び政策に関する先行研究では，松陰の攘夷の理由を現実的な脅威に求めるか，西洋列強による強圧的砲艦外交に屈する国の体面に求めるか，または，水戸学や国学に見られる華夷秩序に求める説などが見える。

(3) 「尊王攘夷」論について

「尊王攘夷」論は，一般的には幕末において中心的な役割を果たした理念である。として朱子学の「尊王攘夷」論は，朱子学を官学として受け入れた江戸時代において，武士に受け入れられた。尾藤正英氏は，尊王攘夷思想について，「日本で尊王が唱えられる場合には，政治上の実

権の有無とは無関係に存続する君主としての天皇が尊崇の対象とされる」(注九) と述べて，日本における「尊王攘夷」論は易姓革命による有徳者による君主制と異なるとし，日本の「尊王攘夷」論に朱子学の影響を認めつつも，日本独自の思想とした。

「尊王攘夷」という言葉は，水戸藩主徳川斉昭が著した『弘道館記』に見える。『弘道館記』に「我が東照宮，撥亂反正，尊王攘夷，允に武，允に文，以て太平の基を開きたまふ。我東照宮撥亂反正，尊王攘夷，允武允文以開太平之基。」とある。徳川斉昭の祖先である東照宮，つまり徳川家康が乱れた世を治め正道に戻し，天皇家を尊び，夷狄を除き，武力と文治をして太平の世の礎を築いたと述べている。また，水戸学においては「尊王攘夷」について会沢正志斎著『退食間話』に，次のように述べている。

> 東照宮に至りては，益々朝廷を尊給ひ，永世まで大祀行はれ，その後義公の礼儀類典を撰ばれしを進献ありしより，礼儀全備して，幕府よりも其料を調進ありしかば，曠代の廃典全く再興して，御代ごとに行はるる事となりしよし承る。是等の事，皆尊王の義と申奉るべき也。

つまり，東照宮こと徳川家康により朝廷の祭祀が再び行われることになり，義公こと徳川光圀により祭祀の儀礼の典籍が朝廷に献上され，即位の儀式の費用も幕府から献上された。古の儀礼が再興され，ことごとに儀式が行われるようになり，これを会沢正志斎は尊王としている。また，攘夷についても江戸幕府にことよせて次のように述べている。

> 西洋の邪徒，神州を伺ふ事を深く察し給ひ，其禁を甚厳にし給ふ。台徳・大猷二公も，其遺志を継せられ，寛永の年までに尽く誅戮し，永世の禍根を絶給ひ，国威の外国に震ひしは，是皆，東照宮の深謀遠慮に因る所なれば，攘夷の義と称し奉るべき也。

会沢正志斎は，二代将軍徳川秀忠（台徳）及び三代将軍徳川家光（大猷）によって行われたキリスト教徒に対する禁教弾圧を攘夷としている。この禁教弾圧は，諸外国に対し日本の国威を盛んにしたのは，東照宮の深謀遠慮によるものだとしている。

ここまでで分かるのが以上のように，水戸学における「尊王攘夷」は，江戸幕府の存在を前提とした「尊王攘夷」論であり，朝廷と幕府を切り離したものでもなく，更に言えば，政治の主体はあくまでも幕府である。ゆえに，討幕論へと変化する「尊王攘夷」論とは水戸学における「尊王攘夷」論を同一のものとして語ることはできない。幕末に討幕論へと変化する「尊王攘夷」論は，天皇の臣下として幕府を雄藩とされる諸藩と，同列とすることで幕府と諸藩の地位の高下を相対化することで，はじめて討幕の理論となるのである。実際に，明治維新を主導したの

は，長州や薩摩といった雄藩であり，「尊王攘夷」論をはじめて提唱した水戸藩は明治維新を主導した藩の中には入っていない。ゆえに，水戸学における「尊王攘夷」と幕末において討幕論へと変化した「尊王攘夷」論は区別すべきである。

また，幕末における討幕論へと変化する「尊王攘夷」論について，尾藤正英氏は，「幕府に尊王と攘夷とを実行させるための政治運動の激化をみることになるのではあるが，この意味での尊王攘夷運動は，最初から幕府批判の色彩をおびており，それが討幕運動に発展するのは，いわば時間の問題であった。」(注十) と述べている。しかし，尾藤正英氏は「尊王攘夷」論が討幕論へ変化したと見ている。「尊王攘夷」論がはじめから討幕の性格を有していたという説には疑義があるように思われる。ただ「尊王」論をつきつめていけば，必然的に幕府の存在に懐疑的にならざるを得ないからである。例えば，『大日本史』や『日本外史』において足利尊氏は逆臣として扱われている。だが，足利尊氏と徳川家康の違いは何か。水戸学では，徳川家康の尊王を殊更強調しているが，幕府という存在の性格上，「尊王」論と必然的に対立せざるを得ない。また，水戸学における「尊王攘夷」論は，最後まで討幕には向かわなかった。ゆえに，幕末における「尊王攘夷」論は，「攘夷」の正当化としての「尊王」論を突き詰めた結果，現実問題及び理念上においても幕府の存在は，不必要となり，当然の帰結として倒幕論へと変化する「尊王攘夷」論が生まれたと思われる。松陰の「尊王攘夷」論は，水戸学の「尊王攘夷」論が倒幕論へと変化する過程で生まれた「尊王攘夷」論であると考えられる。

第二節　幼少期から東北遊学にかけての思想

まず，吉田松陰の幼少期から東北遊学までの思想について見ておこう。この時期の吉田松陰の忠誠観と対外認識及び政策を考える上で重要な事件となるのが東北遊学である。東北遊学とは，吉田松陰が藩の許可を得ずに，脱藩というかたちで東北を遊学したことを指す。吉田松陰は，この旅で自己の思想形成に影響を与える水戸の地を訪れ會澤正志斎や豊田天功と会い教えを乞うている。また，吉田松陰はこの旅で弘前にまで足を伸ばしている。これは勿論，この時期すでに現実としての脅威として存在した夷狄が現れていたためである。吉田松陰の幼少期から東北遊学までの思想，忠誠観と対外認識及び政策を知る上で東北遊学前後の資料は欠かせない。ここでは，東北遊学前後の資料から吉田松陰のこの時期の忠誠観と対外認識及び政策について考察を加えてみたい。

(1)　幼少期から東北遊学までの忠誠観

松陰が二十歳の時に藩主毛利敬親に進講した『武教全書』の講案である『武教全書講章』の中に，松陰の忠誠観がみてとれる箇所がある。

若シ暴乱ノ世ニ仕ルモノ，吾祿ハ先祖以来ノ知行ナリ，少シモ傷ツケハ不孝ナリトテ，面諛因循シテ苟モ容ラルルコトを取リ，直諫讜言セズハ，寵栄セラレテ身ヲ全キニ終フルドモ，聖道ノ容サル所ナリ，又君臣ノ義ヲ重ンジ，忠諫シテ少シモ曲ケズ，終ニ家絶身亡フドモ必ズ云ン，世祿ノ士サコソアルヘキコトト，

松陰は，暴君暗君の世に仕えてる者でも，その禄は，先祖伝来の知行であり，少しでも損ってしまえば不孝であるとし，阿諛迎合して用いられることを取って，直接諫言しないなら，寵愛されて身を全うしても，武士としては容認できないとしている。また，君主と臣下の義を重く考え，諫めて少しも曲げず，その結果，家が絶えて身が滅んでも，必ず先祖以来の家臣ということができるとしている。ここでわかる松陰の忠誠観は，松陰は，孝と忠では，忠を重んじているという点である。更に，家を栄えさせるという実利よりも先祖以来の家臣といわれるという名誉を重んじている。また，『礼記』曲礼下にみえる，三度諫めて聞き入れられなければ去る，というような契約関係の君臣観ではない。松陰の諫言は，容れられなければ死ぬまだというのである。松陰の幼少期から東北遊学までの忠誠観が見て取れるのが『未忍焚稿』の「對人問忠」である。『未忍焚稿』は，弘化二年から嘉永三年頃までの詩文を集めたものである。弘化二年から嘉永三年ごろは，長州藩の山鹿流兵学師範としての研鑽を積んでいた時期である。この時期に著された『未忍焚稿』の「對人問忠」には次のようにある。

或るひと問ひて曰く，「忠の道如何。」曰く，「忠の道は承順に非ず，趨走に非ず，惟だ中心のみ。」曰く，「中心とは何ぞや。」曰く，「実を以てして功名の為にせざるの謂ひなり。」縱令功名高大なりと雖も，実を以てせざれば，亦，忠と為すべからざるなり。故に君子和して同ぜず。昔の忠臣皆然り。唐虞の時，羣臣相ひ和諧す。然れども其の事を議するや，相兪咈し，必ずしも同せず。蓋し唐虞の臣，善く忠の道を尽くすなり。
或問曰，「忠之道如何。」曰，「忠之道非承順，非趨走，惟中心而已矣。」曰，「中心何也。」曰，「以実而不為功名之謂也。」縱令功名雖高大，不以実，亦，不可為忠也。故君子和而不同，昔之忠臣皆然。唐虞之時，羣臣相和諧焉。然其議事也，相兪咈，不必同焉。蓋唐虞之臣，善尽忠之道也。

松陰は，忠について人に問われ，忠というのは功名ではなく実を以てするとしている。更に功名ばかりで実を伴わなければ，忠ではないとし，昔の君臣は，関係は和やかであるが，同調はしなかったとしている。松陰の忠誠観は，名声を重視せず，実を重視するものである。この実とは，個人の私益を指すものではなく，公益を指すものである。この忠誠観から，松陰が藩の許可を得ずに脱藩し，東北遊学に出た理由が判然とする。個人の名声を考えれば，藩の許可を得ずに脱藩という形で東北遊学に出ることは，考えられない。なぜならば，脱藩は，重罪であ

り場合によっては死罪のうえ家禄没収に処されることもあり武士にとっては重い罪である。しかし，松陰が脱藩という形で東北遊学にでたのは，脱藩の罪より他藩士との東北遊学の旅立ちの期日の約束を守ることの方に実があると考えたためである。

まとめると，この時期の松陰の忠誠観は，一般的に想起される君主の意見を絶対視するという封建社会下の君臣関係というよりも，臣下が自らを律する君臣関係である。さらにこの段階では，幕府や朝廷といった存在または他藩の存在を自己の忠誠観の中に組み込んではいない。しかし，東北遊学で分かるように他藩士との交流もあり長州の外を見る目は養っていた。

⑵　幼少期から東北遊学までの思想における対外認識及び政策

松陰は，長州藩の山鹿流兵学師範であるが，長沼流兵学や西洋陣法も学んでいる。松陰に西洋列強へ目を向ける契機を与えた人物は山田亦介である。山田亦介は，長州藩士で松陰に長沼流兵学を授けた人物である。松陰が，山田亦介によって西洋に目を向ける契機を得たと述懐している。『戊午幽室文稿』の「與含章齊山田先生書」で

> 因に思ふに十四年前，僕年甫め十六にして，先生に含章齊に謁す。先生一見して僕を招きて謂ひて曰く，「近時歐夷日に盛んにして，東洋を侵蝕す。印度先に其の毒を蒙りて，満清継ぎて其の辱を受く。餘焔(注十一) 未だ熄まず，琉球を朶頤し，崎[illegible](注十二) に突來す。天下の人士は，方に心を痛め首を疾み，防禦を以て急務と為すは，殊に夷の東侵を知らず。」
> 因思十四年前，僕年甫十六，謁先生含章齊。先生一見招僕謂曰，「近時歐夷日盛，侵蝕東洋，印度先蒙其毒，而満清継受其辱。餘焔未熄，朶頤琉球，突來崎[illegible]。天下人士，方痛心疾首，以防禦為急務，殊不知夷之東侵。」

松陰は，十六歳の時に山田亦介から西洋列強のアジア侵略といった情勢を習い，危機感を募らせる。ゆえに，松陰がはじめて西洋列強を意識したのは，この時であろう。幼少期から東北遊学までの思想における松陰の対外認識及び政策が見て取れるのが，『武教全書講章』の次の箇所である。

> 苟モ一朝夕ノ安ヲ偸ミ，外夷ノ辱メヲ受ケ，南宋ノ如ク夷狄ト敵国ノ禮ヲ用イ，清朝ノ如ク初メ英夷ヲ指シテ，ハルハーレン夷ト称セシニ，後英ヲ名誉ノ国抔ト称シタル様，国體ヲ失ハバ，タトヘ数十年国脉ヲ永クスレドモ祖宗喜ルベキヤ，若クハ祖宗以来ノ国体ヲ確乎トシテ変ゼズ，タトヘ難叶合戦ナリトモ，君ヲ初メテ臣下ドモニ命カギリニ討死シ，少シノ恥辱ヲ蒙ラズンバ，タトヘ数十年ノ国脉ヲ縮ムドモ祖宗怒ルベクヤ，国体ヲ失フモ　ノハ，祖宗イカバカリ喜バルベシ，

ここで松陰は，南宋と清を引き合いに出し，一時逃れの安泰を得るために国體を失うことは出来ないとしている。国體を変えるぐらいであれば，負け戦であろうと戦い君臣共に討ち死にし恥を被らなければ，国を長らえさせるよりも祖宗を喜ばすことになるとしている。松陰は，対外認識及び政策において，実利よりも名誉を重視している。つまり，実利である国脉を長らえることよりも，名分である国體の護持を重視している。

幼少期から東北遊学までの対外認識及び政策とは，勝敗に関わらず現実の脅威である夷狄の排除を目指すことである。

第三節　ペリー来航から下田踏海にかけての思想

嘉永六年，米使のペリーが米艦四隻を率いて浦賀に来航した時，吉田松陰は，江戸にいた。ペリー来航から下田踏海にかけての思想を考える上で無視できないのは，この時代，国外渡航は重罪であり見つかり次第死罪が確定した。そのようなリスクがあるのになぜ松陰は，下田踏海を試みたのか。下田踏海前後の資料から忠誠観と対外認識及び政策について考えてみる。

(1)　ペリー来航から下田踏海にかけての忠誠観

松陰は，ペリーが浦賀に来航していることを知ると，浦賀に赴き米艦の事情を探った。米艦の事情を探った上で松陰は，意見書を藩に提出している。松陰が，米艦の事情を探った上で著した意見書が『将及私言』である。次に挙げるのは，松陰が『将及私言』を著した理由を述べている箇所である。

> 謹按，外夷ノ患所由来久シ，固非始于今日也，然今般亞美理駕夷ノ事，実ニ目前ノ急乃萬世之患也，七月三日，夷舶浦賀港二来リシヨリ，日夜疾走シ彼地ニ至リ，其状態ヲ察スルニ，軽蔑侮慢，実ニ不堪見聞事共ナリ，然ルニ戦争ニ及バザルハ，幕府ノ令，夷ノ軽蔑侮慢ヲ甘ンジ，専，事穏便ヲ主トセラレシ故也，不然今已二戦争ニ及フコト久カラン，然ドモ，往事ハ姑置ク，夷人幕府ニ上ル書ヲ観ルニ，和友通商，買煤炭食物，請南境一港等ノ事件，一トシテ許允セラルベキモノナシ，夷等来春ニハ答書ヲ取リニ来ランニ，所願一モ無許允時ハ，彼豈徒然トシテ歸ラン哉，然レバ，来春ニハ必定一戦ニ及ブベシ，然ルニ太平ノ氣習トシテ，戦ハ萬代ノ後迄モナキコトノ様ニ思ヲナシ，君臣上下一体ト成テ備ヲナスニ非ズンバ，我太平連綿ノ餘ヲ以テ彼ノ百錬千磨ノ夷ト戦フコト難カルベシ，若不然シテ安然渉日時ハ，不可追ノ悔ニ及ブベクト，窃ニ為国家奉痛心也，故ニ忌諱ヲ憚ラズ，妄言ノ罪ヲ避ケズ，當今ノ急務條ヲ論列スル也，

松陰が浦賀で実際に，米艦を見て感じたことをそのまま述べている。松陰からすれば，米夷

の態度は，日本を侮ったものであり，通常であれば，戦争になっているが幕府が穏便に事を済ませようとしているため戦争に至っていないとしている。松陰は，ここで幕府を批判しているが，幕府の政策を批判しているのであり，幕府の存在を批判しているわけではないことに留意しなければいけない。更にここで松陰は，再びペリーが来航した際には，ペリーの要求は到底受け入れられないものなので，戦争になると考え，ゆえに戦争に備え急務の政策を論じている。

松陰の忠誠観を考える上で無視できないのは，松陰が藩主毛利敬親に上書を行ったということである。松陰のこの時の身分は，実父の杉百合之助の育であり，当時の常識から考えれば藩主である毛利敬親に上書できる立場にはない。上書が行なえたのは，松陰と藩主毛利敬親との関係性が特殊であったためである。松陰は，幼少の時から，藩の山鹿流兵学師範となるべく育てられてきた。その過程で幾度も藩主毛利敬親から親試を受け，褒賞も受けている。このように，藩主毛利敬親は，松陰の能力を評価している。そのためか，東北遊学の脱藩についても，実父の杉百合之助の育という，比較的軽い処分で済まされている。上書を行なえたのは，このような松陰と藩主毛利敬親の信頼関係があったためであろう。

『将及私言』の中で，松陰は朝廷と幕府と藩の関係について次のようにを述べている。

> 江戸ハ幕府ノ地ナレバ，御旗本及ヒ御譜代，御家門ノ諸藩コソ力ヲ尽サルベシ，国主ノ列藩ハ各其本国ヲ重スヘキコトナレハ，不必尽力於江戸シテ可ナリト，嗚呼，此輩唯幕府を敬重スルコトヲ知ラザルノミナラズ，実ニ天下ノ大義ニ暗キモノト云フヘシ，夫本国ノ重スヘキハ固ナリ，然レドモ天下ハ天朝ノ天下ニシテ，乃天下ノ天下也，幕府ノ私有ニ非ラズ，故ニ天下ノ内何レニテモ外夷ノ侮リヲ受ケハ，幕府固當率天下諸侯清天下恥辱，以テ天朝ノ宸襟ヲ慰メ奉ルヘシ，方是時，普天率土ノ人，如何デ可不尽力哉，尚何本国他国ヲ択フニ暇アランヤ，

松陰は，江戸が幕府の地であるから，旗本や譜代の大名が守れば良く，毛利家をはじめとする諸大名は，自らの国元を守れば良いという論について非難している。松陰の考えでは，天下は朝廷のものであり，幕府の私有するものではないからである。ゆえに，天下のどの場所であろうと外夷から侮りを受ければ，幕府は諸侯を率いて恥辱をすすぐべしとしている。つまり，松陰は，天皇を頂点とし，次に幕府，そして藩という優先順位で忠誠観を展開している。松陰が「天朝幕府ノ為メニ忠ヲ致シ力ヲ尽スコトハ，一ナレトモ，」と述べているように，松陰は藩よりも幕府の存在を上位においていた。幕府を天朝と共に忠誠を尽くす対象としてみなしている。つまり，松陰は，この段階では，まだ幕府を天朝よりも下位ではあるが，藩よりも上位に位置づけていることがわかる。ペリー来航から下田踏海にかけての松陰の忠誠観は，天朝を頂点とし，次に諸藩をまとめる存在として幕府が存在し，次に藩があると考えていた。

(2) ペリー来航から下田踏海にかけての対外認識

ペリー来航から下田踏海にかけての対外認識及び政策を考える上で重要なのは，松陰の対外認識及び政策の転換である。『異賊防禦策』では，今有する長州藩の武力で十分，攘夷が行なえるという認識であった。しかし，現実の脅威としての西洋列強をペリーの来航によって実感して以来，現状への問題意識も深刻化していく。ペリーの来航の実情を探って著した『将及私言』の中に，松陰の西洋列強に対する対策を述べている箇所がある。『将及私言』の「船艦」で次のように述べている。

> 因テ恐多クモ窃ニ念ヲ労シ一策ヲ得タリ，當今ノ勢，如何ニモ列藩協力ニ非レバ，兎角事不成ベシ，故ニ仙臺・會津・加・越・尾・勢・肥・薩等ノ諸藩侯ト商議遊サレ，水府老公・福山閣老ヘ其ノ事面議遊サレ，或ハ蘭人ニ命シテ艦ヲ貢セシメ，又ハ工匠ニ命シテ新ニ製造シ，並ニ江戸及ビ各藩ニテ，盛ニ水操ヲ興スコトヲ許允アル如クアリ度コトト，

ここで，松陰は長州藩のみでは，攘夷の実現を不可能であると考え，各藩との協力を説いている。更に具体的な藩の名を挙げている。松陰が主張する協力すべき藩とは，仙台の伊達家や会津の松平家や加賀の前田家といった大藩であり，親藩，譜代，外様といった区別は行っていない。松陰は，これらの各藩と攘夷について協議した上で，水戸藩主であり当時声望が高かった徳川斉昭と老中の阿部正弘に相談すべきであるとしている。また，具体策として，江戸時代，既に通商があったオランダに命じて蒸気船を献上させ，職人に命じ新たに蒸気船を作らせる。更に幕府は，江戸及び諸藩にて水軍の操練を認めるようにすべきであるとしている。ここで重要なのは，松陰が陸戦から海戦へと方策を転換している点である。松陰は，『異賊防禦策』では，上陸を阻むことかに重点をおいて説いていた。また，現在有する長州藩の兵力で十分攘夷が行なえるという認識であった。しかし，『将及私言』では，力のある大藩，更には幕府と協力すべきであると説いている。また，オランダに蒸気船を献上させるべきであると説いているように，西洋列強と自国の技術の差を認識している。松陰が，技術の差を認識したのは，長崎遊学中にオランダの蒸気船に乗艦した経験や，佐久間象山の影響が大きかったといえる。

松陰の対外認識及び政策を考える上で，最も重要といえるのが下田踏海である。下田踏海は，松陰が，下田に来航中の米艦に同じ長州人の金子重輔とともに乗り込み，海外に密航しようとした事件である。松陰が，下田踏海の意図を明らかにするために著したのが『幽囚録』である。この中で下田踏海の意図を次のように述べている。

> 強者，間を用ひざれば，宜しく趨くべき所を知らず。弱者間を用ひざれば，則ち宜しく避くべき所を知らず。今人有り，己の聾瞽を憂へずして人の視聴を恐る。人将た之れを何とか謂はんや。

強者不用間，不知所宜趨。弱者不用間，則不知所宜避。今有人焉，不憂己之聾瞽。而恐人之視聴。人将謂之何。

松陰の密航の目的は，自らが間者となり，西洋列強の情勢を探るという所にあった。当時密航は死罪に値する重罪である。松陰はもちろん死を覚悟していた。松陰は，西洋列強と自国の技術の差を認識して危機感を募らせ，密航を企てた。松陰は危機感を表明している。

今は則ち膝を屈し首を低れ，夷の為す所に任す。国の衰へたる，古より未だ曾て有らざるなり。
今則屈膝低首，任夷所為，国之衰，自古未曾有也。

松陰は，今現在の状況を有史以来の危機と認識しているのである。松陰がこのように危機感を抱いたのは，ペリー来航を目撃したことはもちろんのこと師の佐久間象山の影響である。また，危機感を抱く要因になった西洋列強と自国との技術の差を松陰に認識させたのもまた佐久間象山である。松陰が，『幽囚録』の中で佐久間象山について言及している箇所がある。

余平象山に師事し，深く其の持論に服す。事ごとに決を取る。象山も亦善く視て，常に勵まして曰く，「士は過無きを貴しとせず，過を改むるを貴しと為す。善く過を改む　るは固より貴しと為すも，善く過を償ふを尤も貴しと為す。国家多事の際，能く為し難きの事を為し，能く立て難きの功を立つるは，過を償ふの大なる者なり」と。
余師事平象山，深服其持論，毎事取決。象山亦善視，常勵曰，「士不貴無過。改過為貴。善改過固為貴，善償過尤為貴。国家多事之際，能為難為之事，能立難立之功。償過之大者也。」

松陰の下田踏海を後押ししたのは，この箇所からわかるように師の佐久間象山である。松陰が下田踏海の失敗後，佐久間象山も罰せられているように，下田踏海を考える上で松陰と佐久間象山の関係は軽視することはできない。

松陰によれば西洋列強の技術について，「器械技芸は，年を遂ひ変革す。思慮より始まりて試験に成る。素より華夷無し。何ぞ都鄙有らん。器械技芸，逐年変革，始于思慮，而成于試験。素無華夷。何有都鄙。」と述べている。

松陰によれば，技術力は，日々変革し，もともと中華も夷狄もない。また都と田舎もないとしている。ここで，重要なのが，技術力に対しては，西洋列強の力を認めているという点と，技術力は認めるものの，いまだに西洋列強は夷でしかないと見ていることである。更に『幽囚録』の中で，松陰は対外政策として次のように述べている。

則ち宜しく蝦夷を開墾し，諸侯を封建すべし。間に乗じて加摸察加隩都加を奪ひ。琉球を諭し，朝觀會同すること，内諸侯と比しくす。朝鮮を責め，質を納れて貢を奉じせしむること，古の盛時の如し。北は満州の地を割き，南は臺灣・呂宋の諸嶋を収め，漸にして進取の勢を示す。

則宜開墾蝦夷，封建諸侯。乗間奪加摸察加隩都加。諭琉球，朝觀會同，比内諸侯。責朝鮮，納質奉貢，如古盛時。北割満州之地，南収臺灣・呂宋諸嶋。漸示進取之勢。

松陰は，松前藩を除くと未封の地である蝦夷を開墾し，諸侯を封建し，カムチャツカを奪うべきだと説いている。更に琉球を諸大名と同じように遇し，朝鮮に対しては，古と同じように朝貢させるべきであると説いている。また，北は満州を南は台湾と呂宋の島々を手に入れて，進取の姿勢を示すべきだと説いている。松陰のこれらの政策は，攘夷を実現する手段である。つまり，いかにして日本の独立を守るかという政策である。これらから分かるのは，松陰が主張した攘夷は，現実の脅威として西洋列強からいかにして日本の国體，つまりは独立を守るかということに主眼があったと言える。

ペリー来航から下田踏海にかけて松陰は，西洋列強と自国の技術力の差から西洋列強を現実の脅威として認識した上で，技術力の差を埋めるべく西洋列強の情報を取り入れるべきだと考えている。また，技術と華夷論を切り離し，西洋列強は夷と定義している。ここでの松陰の攘夷の具体策としては，武力によって近隣に進出し，力を内外に示すというものである。

第四節　野山獄から松下村塾時代にかけての思想

野山獄から松下村塾時代にかけての思想を知る上で重要な著作が，『講孟余話』である。吉田松陰は，下田踏海の挙の失敗により，江戸から国元に送り返され，長州藩の命により野山獄に収獄される。松陰は，獄中の環境を改善するために，獄囚同志で相互に勉強会を始めた。書道や唐詩の講義の他，松陰が講義したのは『孟子』である。問題になるのが『孟子』には，徳の有無によって君主が代わる「易姓革命」が述べられており，万世一系の皇統に日本の国體を見出す国学や水戸学からは批判を受けている。もちろん，水戸学の影響を受けた松陰も「易姓革命」には，批判を加える。しかし，松陰が，獄中で，囚人に講義するのに選んだのは，『論語』でも『大学』でも『中庸』でもなく，『孟子』であった。松陰の野山獄から松下村塾時代にかけての思想を考察する上で，『講孟余話』のみを資料とするのは，批判を受けるかもしないが，この時期の松陰の思想を考察する上で，『講孟余話』以上にふさわしい資料はない。なぜならば，『講孟余話』は，『孟子』の注釈書というよりも，『孟子』に事寄せて，松陰が時勢に対し，思う所を書き加えたものであるため，松陰の忠誠観や対外認識が明確に表れているからである。ゆえに，この章では，『講孟余話』における松陰の忠誠観と対外認識及び政策に着目し，野山獄か

ら松下村塾時代にかけての思想を明らかにしたい。

⑴　野山獄から松下村塾時代にかけての忠誠観

松陰が『孟子』をいかに認識していたのか，忠誠観を軸として松陰が影響を受けた水戸学の代表的学者である藤田東湖の『孟軻論』と比較しつつ考察してみたい。松陰は，「孟子序説」で，次のように述べている。

> 経書を読むの第一義は，聖賢に阿らぬこと要なり。若し少しにても阿る所あれば，道明かならず，学ぶとも益なくして害あり。孔・孟生国を離れて他国に事へ給ふこと，済まぬことなり。凡そ君と父とは其の義，一なり。我が君を愚なり昏なりとして，生国を去りて他に往き，君を求むるは，我が父を頑愚として家を出で，隣家の翁を父とすることに斉し。

松陰は，経書を読む上での注意点として，聖賢に阿らぬことを挙げている。つまりは，聖賢の言葉であるから，全て正しいと考えることは，自己で考えることを放棄することである。そのようになれば，益よりも害が多いと説いている。また，松陰の批判は，孔子と孟子が他国で仕えたことに言及している。これは，『孟子』の「易姓革命」批判にもつながる。松陰は，ここで，自分の君主が暗愚であるから，国を捨て他国に去るのは，自己の父が暗愚であるため隣の翁を父とするものと同じであると説いている。中国においては，徳の低い者から，徳の高い者へと王権が移行することを，「易姓革命」とし是認している。しかし，日本の国體を，万世一系の天皇に見出す松陰からすれば，他国に仕えることは是認出来ないのである。

一方，藤田東湖は，『孟軻論』の中で，孟子を次のように批判している。

> 今や，然らず。口を開けば，則ち王道を談じ，其の説の歸する所を，要するに，斉梁の君をして天下に王たらしむに過ぎざるのみ。嗚呼，周室衰ふと雖も，尚ほ正統の在る有り。軻，周の世に生まれ，周の粟を食ふ。何ぞ心に能く忍んで其の説を發するか。
> 今也不然。開口則談王道，要其説之所歸，不過使斉梁之君。王於天下而已。嗚呼，周室雖衰，尚有正統在焉。軻生於周之世，食周之粟。何心能忍而發其説耶。

藤田東湖は，孟子は王道を説きながらも，結論としては，斉や魏に武力で天下を取らせようとしていると批判している。また，藤田東湖が批判するのは，周王室がまだ存続しているのに，孟子は周王室の恩義を忘れ，斉や魏に加担していると考えたためである。

『孟子』に対する見方は，松陰も藤田東湖も異ならない。つまり，この段階での松陰の君臣観は，水戸学と余変わらないと見られる。

『講孟余話』離婁上篇の第十三章では，次のように臣下のあるべき姿を述べている。

国強く勢盛んなる時は，孰れも忠勤を励むものなり。国衰へ勢去るに至りては，志を変じ，敵に降り，主を売る類，寡からず。故に人は晩節を全うするに非ざれば，何程才智学藝ありと雖ども，亦何ぞ尊ぶに足らんや。明主に忠あるは珍しからず，暗主に忠なるこそ真忠なれ。慈父に孝あるは珍しからず，頑父に孝なるこそ真孝なれ。賞誉せられて忠孝なること珍しからず，責罰せられて忠孝なるこそ真の忠孝なれ。士大夫たる者，嗜むべきこと実に爰にあり。

松陰は，国が衰退しようと，君主が暗愚であろうと臣下として仕えるのが真忠であり，士大夫はこのようにあるべきであると説いている。ただし，松陰の忠誠観に一定の変化が見える。松陰は，天朝に次いで忠義を尽くす存在として幕府を位置づけてきた。しかし，尽心下篇の第十七章では次のように述べている。

夫人情自国を恋ふこと斯に至る者，他なし，君あり，親あり，墳墓あり，室家あるを以てなり。苟も思を爰に致さば，忠臣二君に仕へざるの理自ら明かにして，防長の臣民は防長に死生すべく，皇国の臣民は皇国に死生すべきの義に至りて，何ぞ疑を容れん。是れ余『講孟箚記』を作る第一義なり。故に開巻に於て已に是を論ず。合せ考ふべし。

ここでは忠義を尽くす対象から，幕府は除かれている。松陰は，長州藩つまり防長二国の者は，防長二国のために死ぬべきであるとしている。そして，防長二国を包括する存在として皇国を挙げている。今までの，天朝を頂点とし，次いで幕府，そして藩という忠誠観から，天朝を頂点とし，次に藩とする忠誠観へと変化している。変化の要因としては，浄土真宗の僧である宇都宮默霖との文通が考えられる(注十三)。松陰は，宇都宮默霖との文通により，自らの忠誠の対象から，幕府を排除した。しかし，ここで注意しなければいけないのは，この時点で松陰は，決して倒幕を主張しているわけではないという点である。

(2) 野山獄から松下村塾時代にかけての対外認識及び政策

松陰は，この時期すでに，西洋列強と自国との技術力の差は認識している。しかし，松陰からすれば，西洋列強は，攘夷の対象である。この事が顕著に述べられているのが，次に挙げる公孫丑上篇の第四章である。

其の他，武蔵の神奈川，志摩の鳥羽，摂津の難波等，夷人已に去ると雖ども，腥羶の気汙染して未だ去らず。然らば則ち神州の其の汙を受けざる者幾許ぞや。事已に茲に至る。間暇幾時ぞや。幸ひに今数年の災を紓ぶ。実は不治の病を護す。是の時に乗じ惟日も足らずとして，日夜刻苦勉厲，上に在りては其の政教を修め，士大夫に在りては其の学藝を錬り，

農・工・商賈は各々其の業を勤め，務めて牖戸を綢謬し，下民の侮りを禦ぐべし。

松陰は華夷秩序の下で西洋列強を見るという視点を取り去っていない。更に，この時期の松陰の対外認識が同じ公孫丑上篇の第四章に表れている。

然れども夷の砲[illegible]船艦，医薬の法，天地の学，皆吾に於て用あり，宜しく採択すべし。其の皇国の用を成すに至りては，亦夷狄にして中国に進むと云ふべし。

松陰は，夷，つまりは西洋列強の技術力は認めている。しかし，ここでも分かるように松陰は，日本と西洋列強の関係を華夷秩序で捉えるという考えから脱し切れていない。松陰は，西洋列強が日本より優れている点として以下の点を挙げている。

今や欧羅巴・米利幹の夷輩，万国を梯航し，宇内を合して一となさんと欲す。是又其の智能人に過ぐることあるに非ず。唯其の大艦巨舶，万国を以て比隣とするの故を以て能く然り。

つまり，西洋列強が万国を航海し，世界を一つにしようとしている。これは，智能が優れているためでなく，ただ大艦巨舶を持ち，ゆえに万国を近隣とすることができるためである。また，松陰の対外認識が顕著に表れているのが，梁恵王下の卷一の第三章である。

況や方今，外夷四面より我が釁隙を伺ふ。此の時に当りて六十州の人心を一塊石となし，以て彼の小醜を懲らし海波を清めんこと甚だ久遠，敢て一旦の利害を較せず，一時の屈伸を論ぜず，遂に善く大仇を斃し，大功を建つる，実に欣慕に餘りあり。

松陰は西洋列強を脅威として認識した上で，この時勢においてまず優先して考えるべきは，攘夷であると述べている。

野山獄から松下村塾時代にかけての対外認識及び政策をまとめると，松陰は，西洋列強と日本の技術力の差は認識している。ゆえに，松陰からすれば，西洋列強は深刻な脅威である。松陰は華夷秩序による名分論のもと，西洋列強を夷狄として認識し非難している。しかし，松陰は，華夷秩序による名分論から攘夷を主張するのではなく，現実に直面する脅威と認識したため攘夷を主張している。なぜならば，夷である西洋列強の技術に対しては，取り入れるべきであるという姿勢を崩していないからである。国学に見られる華夷秩序による名分論の攘夷であれば，西洋列強の技術がいかに優れていようとも，取り入れるべきだという考えには至らない。ゆえに，松陰が，西洋列強を非難し，攘夷を主張した理由としては，西洋列強を現実の日本の

独立を侵す脅威と認識したためであると考えられる。

第五節　幕府違勅調印から要駕策の企図までの思想

幕府違勅調印から要駕策の企図までの間に，松陰の幕府に対する認識にどのような変化が見られるか，見てみよう。今まで述べてきたように松陰の忠誠観における，幕府の地位は相対的に低下していく。幼年期においては，幕府は忠誠の対象ではなく，下田踏海までの期間においては朝廷に次ぐ忠誠を奉げる対象であった。そこから松下村塾時期までに，幕府は忠誠の対象から除外される。幕府の違勅調印により松陰の幕府に対する姿勢は異なってくる。本節では，安政五年の幕府違勅調印前後の資料に基づき松陰の忠誠観と対外認識及び政策について考察する。

(1)　幕府違勅調印から要駕策の企図までの忠誠観

安政五年六月十九日に日米修好通商条約が締結される。この条約の締結の前に，幕府は勅許を必要と考え，老中堀田正睦を上京させるも勅許を得られず，ついに大老の井伊直弼は勅許のないまま，日米修好通商条約に調印する。勅許を得ないまま条約に調印したことは，幕府の予想以上に，尊王攘夷派の志士を刺激する結果を招く。松陰の思想を考える上で，この違勅調印は，松陰の敬幕論が消極的な倒幕論へと変化する契機となっていると思われる。これを契機に，松陰は間部要撃策や伏見要駕策を企図しているからである。消極的な倒幕論へと変化する萌芽が見られるのが，違勅調印の二年前の安政三年に著した『丙辰幽室文稿』の「又讀七則」である。

> 天朝を憂ひ因りて遂に夷狄に憤る者有り。夷狄に憤り因りて遂に天朝を憂ふ者有り。余幼くして家学を奉じ，兵法を講じ，夷狄国患憤るべからざるを知る。尓後偏に夷狄の横なる所以を考ふるに，国家の衰ふる所以を知り，遂に天朝の深憂，一朝一夕の故に非ざるを知る。然れば其の孰れか本孰れか末なるか，未だ自ら信ずること能はず。向に八月間，一友のために啓発せらる。矍然として始めて悟る，従前は天朝を憂へ，並びに夷狄に憤るが為に見を起こす。
> 有憂天朝因遂憤夷狄者。有憤夷狄因遂憂天朝者。余幼奉家学，講兵法，知夷狄国患不可不憤。尓後偏考夷狄之所以横，知国家之所以衰，遂知天朝之深憂，非一朝一夕之故。然其孰本孰末，未能自信。向八月間，為一友啓発。矍然始悟。従前憂天朝，並爲憤夷狄起見。

松陰は，宇都宮默霖との文通によって，尊王と攘夷の本末を悟ったと告白している。松陰は尊王が本であり，攘夷が末であるとしている。安政五年の幕府による日米修好通商条約の違勅

調印の段階で，既に尊王と攘夷の本末論を悟っており，ゆえに，松陰は敬幕論から消極的倒幕論へと変化せざるを得ない状況に至る。

先に挙げた『丙辰幽室文稿』の「又讀七則」に長州藩と幕府の関係をどのように捉えていたのか窺える箇所がある。

> 我と足下と，是を以て吾が君に事へ，吾が君是を以て幕府を諫む。我是を以て吾が君に事ふ。吾が君允さざれば，則ち死して後已む。吾が君之を允さば，是を以て幕府を諫む。幕府従はず，吾が君必ずしも死せざるなり。何ぞや。幕府の恩義重しと雖も，吾が君の君に非ざるなり。況んや上天朝在り有り。何ぞ輙死を得んや。帥公の任，是に於けるや，実に吾が君に在り，是軽議すべきに非ざるなり。
>
> 我與足下，以是事吾君，吾君以是諫幕府。我以是事吾君。吾君不允，則死而後已。吾君允之，以是諫幕府。幕府不従，吾君不必死也。何也。幕府恩義雖重，非吾君之君也。況上有天朝在焉。何得輙死乎。帥公之任，於是乎，実在吾君，是非可軽議也。

つまり，松陰は自らと長州藩主の関係と長州藩主と幕府の関係において，松陰と藩主の関係は君臣関係であるが，藩主と幕府の関係は君臣関係ではないとしている。このようにより松陰は，幕府と長州藩を朝廷の臣下であるという点において対等とすることで，消極的な倒幕論へと傾いていく。

また，松陰は，幕府が違勅調印を行った安政五年に，『戊午幽室文稿』を著している。『戊午幽室文稿』の中で松陰は，幕府について次のように述べている。

> 試みに洞春公をして今日に生まれしめば，其れ之を何と謂はん。夫れ陶賊特だ其の主に叛くのみ。洞春公すら猶ほ且つ聽さざるがごとし。今征夷，國患を養ひ，国辱を貽り，而して天勅に反き，外に夷狄を引き，内に諸侯を威す。然れば則ち陶は一國の賊なり。征夷は天下の賊なり。今措きて討たざれば，天下萬世其れ吾を何と謂はん。而して洞春公の神，其れ地下にて享けんや。
>
> 試使洞春公生于今日，其謂之何。夫陶賊特叛其主耳。洞春公猶且不聽。今征夷養國患，貽国辱，而反天勅，外引夷狄，内威諸侯。然則陶者一國之賊也。征夷天下之賊，今措而不討，天下萬世其謂吾何。而洞春公之神，其享于地下乎。

松陰は，幕府を違勅の国賊とし，幕府を討とうとしないことを問題としている。更に，松陰は，幕府の違勅を中国の古代の暴君である桀や紂の行いと同じとしている。このことからも松陰が違勅問題をいかに重く考えていたのかわかる。また，松陰は，長州藩の藩祖である洞春公即ち毛利元就が，今生きていれば，幕府の罪を許さないだろうと述べている。加えて，毛利元

就が劣勢の中で陶晴賢を破った宮島の戦いを引き合いに出し，幕府が強力であるから討たないという論を非難し，国賊である幕府を討たなければ，後世の人は自分をどう評価するか，また，毛利元就にどう思われるか，と述べている。松陰は，『戊午幽室文稿』の「示諸友」で長州藩及び藩主毛利敬親について次のように比較している。

> 已に而して勅旨汗発し，征夷諸侯を責むるに攘夷を以てす。征夷諸侯未だ奉ずる有る能はず。独り吾が公奮然として有司を鼓舞し以て勅を奉ず。
> 已而勅旨汗発，責征夷諸侯以攘夷，征夷諸侯未能有奉焉，独吾公奮然鼓舞有司以奉勅，

ここで，松陰は，長州藩及び長州藩主毛利敬親がいかに勤王であるかということを強調している。松陰が長州藩及び藩主毛利敬親の勤王を強調しているのは，消極的倒幕論を形成する上での名分である。松陰は，尊王と攘夷の本末を悟ったとし，尊王を本とし攘夷を末としている。攘夷の点から考えれば，日米修好通商条約の調印には問題はない。しかし，尊王の点から考えれば，勅許を得ずに条約を締結したことは問題である。ゆえに，攘夷を行ったのは長州藩だけだと述べている。安政三年頃に幕府を自己の忠誠の対象から除外し，安政五年の違勅調印により倒幕論へと傾きはじめたことが分かる。

(2) 幕府違勅調印から要駕策の企図までの対外認識及び政策

次に，松陰の幕府違勅調印から要駕策の企図までの対外認識及び政策を考察する。松陰の対外政策は『戊午幽室文稿』に見られる。「対策一道」「愚論」「続愚論」がそれである。これらの策は，藩主毛利敬親の上覧に供せられている。松陰は，「対策一道」の中で，鎖国論と開国論の双方について次のように批判している。

> 若し乃ち封關鎖國，坐して以て敵を待たば，勢屈し力縮みて，亡びずんば何をか待たん。且つ神后の韓を平げ，貢額を定め，官府を置く。時に乃ち航海有り，通市有り。徳川氏征夷に任ず，時に固より航海して通市せり。其の後天下已に平かに，苟偸無事なり。寛永十三年，乃ち盡く之を禁絶す。然らば則ち航海通市は，固より雄略の資にして，祖宗の遺法なり。鎖國固より苟偸の計にして，末世の弊政なり。然りと雖も之を言ふこと難きもの有り。今の航海通市を言ふ者，能く雄略を資くるに非ず，苟も戰を免れんのみ。其の志固より鎖国者の戰を以て憚りと爲さざるに如かざるなり。故に世の和を言ふ者，心実に戰を畏れ，内に自ら恧ずる有り。一たび吾が言を聞かば，將に口に籍りて恧ぢるあらんとす。是に於いて，和を排し戰を主とする者，又従つて之を攻むれば，吾が説躓かん。是れ其の言ふに難き所以なり。
> 若乃封關鎖國，坐以待敵，勢屈力縮，不亡何待，且神后之平韓，定貢額，置官府，時乃有

航海焉，有通市焉。徳川氏任征夷，時固航海而通市矣。其後天下已平，苟偸無事。寛永十三年，乃盡禁絶之。然則航海通市，固雄略之資，而祖宗之遺法。鎖國固苟偸之計，而末世之弊政也。雖然言之有難焉。今之言航海通市者，非能資雄略。苟免戰耳。其志固不如鎖国者之不以戰爲憚也。故世之言和者，心実畏戰，内有自恧。一聞吾言，將有籍口而不恧。於是，排和主戦者，又従而攻之，吾説躓矣。是其所以難於言也。

松陰は，鎖国は一時しのぎの間違った策であり，敵つまりは西洋列強が来るのを待っていたら，勢いをなくし，結果として滅んでしまうと述べている。一方，開国論についても，松陰は，人が開国を主張するのは，戦を逃れたいためで，自己の雄略論とは異なるとしている。松陰の「雄略論」とは，「続愚論」に「英咭唎・仏蘭西などの小国にてさへ，万里の遠海へ亙り人を制し候は，皆々航海の益に御座候。」と述べている航海通市である。

松陰は，イギリスやフランスといった小国でさえ，世界を航海し他国より優位に立てたのは，全て航海によるものであると考えている。かつて武力による他国進出を考えた松陰が，交易による他国進出を目指すべきだと主張しているのである。つまり，西洋列強と同様に積極的に海外に進出し貿易を行うのが良いというのである。

次に松陰は，航海通市即ち「雄略論」を実現するにはどのようにすれば良いのか三つの方策を提示している。第一に「航海は一科の学に相成り居り候事に付き，学校中へ此の学所一局相建て，其の学に長じ候もの入学仕らせ候儀一説」と述べ，藩校に航海を専門とする学科を創設することを提言している。第二に，「二十左右少壮の者を諸国の港々へ遣はし通船に託し，海勢並びに船上の事心得させ，又志あるもの十歳左右の童子をも丸に船頭に託し置き候事勝手に致させ，専ら其の術を精究致させ度く，」と述べ，若者に船の操練を課すべきと説いている。最後に，「和蘭陀は二百年来来航仕り候事にて，墨夷其の外新来の夷国とも違ひ，且つ往々御国の御為めを謀り候事に付き，此の船に託し壮士数十人づつ年々広東爪哇其の外に御遣はし成され候。」と述べ，通商があったオランダに協力させ，若者を留学させるべきだと説いている。これが，松陰の主張する「雄略論」である。

松陰の対外認識及び政策は，武力で近隣に進出する「雄略論」から，近隣の各地に市を置き，西洋列強同様交易によって国力を蓄えるという「雄略論」へと変化している。しかし，西洋列強を脅威と認識し，日本の独立を現実に脅かす存在であると考えていたことに変わりはない。

第六節　要駕策の失敗から小伝馬町での刑死までの思想

要駕策の失敗から刑死までの思想において注目されるのは，「草莽崛起論」である。一般的に「草莽崛起論」は，封建社会の下における身分制度を否定したと解釈されている。しかし，一方で，松陰は限定的に身分制度を能力によって超越することを是認しただけで，封建主義下にお

ける身分制度を否定したわけではないという解釈もある(注十四)。ここでは，松陰が著した資料に基づき「草莽崛起論」を再考する。

対外認識及び政策では，問題としては松陰の攘夷と「雄略論」の関係性である。一見，攘夷と通商を軸とする「雄略論」は矛盾する。ゆえに，松陰が，晩年に至り攘夷の実現を放棄したとの解釈もある。ここで，松陰の攘夷と「雄略論」の関係について考察を加えてみたい。

(1) 要駕策の失敗から小伝馬町での刑死までの忠誠観

まず「草莽崛起論」を唱えた際の松陰の状況を見ておこう。「草莽崛起論」を唱えた時，松陰は間部要撃策を企て再び野山獄のに投獄された。間部要撃策とは，老中の間部詮勝が上洛する際に，意見を具申し容れられなければ討ち取るという策である。松陰は計画を実行するため武器の借用を藩に願い出て，間部要撃策が露呈し，野山獄に収監される。「草莽崛起論」を唱える契機となったとされるのが，伏見要駕策である。伏見要駕策は，もともと梅田雲浜門下の播州浪人の大高又次郎と備中浪人平島武二郎が幕府の改革と政策の変更を長州藩に依頼するための策である。この提案を長州藩が拒んだ場合に，伏見にて公卿の大原重徳と同志三十余名と江戸参府のため伏見を通る長州藩主毛利敬親を待ち受け，同道して，京に入る計画である。藩は，播州浪人の大高又次郎と備中浪人平島武二郎との面会を拒み，事実上，この伏見要駕策を拒絶した。松陰は，要駕策に参加しなければ，長州藩は，朝廷または他藩から勤王の藩ではないと見なされると考えた。ゆえに，松陰は松下村塾の同志のみで伏見要駕策に参加しようとする。しかし，弟子の多くは，伏見要駕策に反対，もしくは自重を唱え松陰を失望させる。松陰は，間部要撃策や伏見要駕策における藩政府の対応に，不信を抱くようになる。松陰が，草莽崛起論を唱え始めるのもこの時期である。

次に「草莽崛起論」の内容を見てみよう。資料として松陰が，師の佐久間象山の甥である北山安世に宛てた手紙に「草莽崛起論」が述べられている。

> 今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし。されど，本藩の恩と天朝の徳とは如何にしても忘るるに方なし。草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し，遠くは天朝の中興を補佐し奉れば匹夫の諒に負くが如くなれど，神州に大功ある人と云うべし。

松陰は長州藩の恩と朝廷の徳は忘れられないとして，幕府と諸藩に見切りをつけている。草莽崛起論は，既存の封建社会の身分秩序を破壊し，尊王攘夷の実現を望む論のように誤解されてきた。しかし，松陰が述べているように長州藩と朝廷に対しての恩と徳は忘れられないと考えているのであり，松陰の忠誠観における朝廷と藩の地位は不変である。

更に弟子の中で伏見要駕策に賛同した野村和作宛てでは手紙に次のように述べている。

吾豈忘今公之恩哉此恩當代ニ報せぬハ萬々遺感ナレドモいつデモ尊攘の為ニ死して差し上るなり。乍恐天朝も幕府吾藩モ入ラヌ只六尺ノ微軀が入用サレド義卿豈負義人哉御安心々々々。

松陰は，朝廷も幕府も長州藩も必要ないとしているが，長州藩主毛利敬親が必要ないと述べているわけでは無い。同じ手紙の中で，今公つまり，長州藩主毛利敬親の恩に報いることができないのは遺憾であると述べている。長州藩主毛利敬親に対する忠誠心は変わっていないのである。松陰の忠誠観が顕著に表れているのが，安政六年の野山獄中で著された『己未文稿』である。『己未文稿』の「知己難言」で次のように述べている。

而して或ひは謂ふ，「事或ひは行府に聞こへ，禍すら且つ測れず」と。吾其の心を探るに，行府に阿らんと欲せば，則ち義卿を曲げざるを得ず。義卿曲がらば，政府直，其れ吾が公を如何せん。吾が公旨有り，囚臣感激す，政府上は公旨を挫き，下は囚臣の志を抑ふ。
而或謂，「事或聞行府，禍且不測。」吾探其心，欲阿行府，則不得不曲義卿。々々曲，政府直，其如吾公何。吾公有旨，囚臣感激。政府上挫公旨，下抑囚臣志。

松陰は藩の政策と藩主毛利敬親の意向とを分離して理解している。ゆえに，長州藩を必要ないとしながらも，藩主毛利敬親の恩は忘れられないとしている。一見したところ矛盾しているような忠誠観も成立し得るのである。

松陰は忠誠観をまとめると，天皇が頂点に位置し，次に藩主毛利敬親が位置している。松陰は，既存の封建社会下における身分制度を否定したわけではなく，組織と個人を分離し，個人との関係性から忠誠観を構成し直したと言える。

⑵　要駕策の失敗から小伝馬町での刑死までの対外認識及び政策

要駕策の失敗から小伝馬町での刑死までの対外認識及び政策において，攘夷論と「雄略論」の関係性がどうなっているのか。ここで考えてみたい。安政六年，高杉晋作宛ての手紙で次のように述べている。

幕府初ハ墨夷ヲ倩テ諸夷ヲ制シ諸侯ヲ抑ヘント欲ス而シテ今ハ何トナク悔悟ノ色アリ悔悟スルドモ應懲ノ奇策ナケレハ淪胥與喪ノ外致方ナシ

松陰は，高杉晋作宛ての手紙で幕府の政策を批判している。その遺著となる『留魂録』の辞世の句の中で次のように詠んでいる。

討たれたる吾れをあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ
七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや

この辞世の句から分かるのは，松陰が終生，攘夷の実行を諦めなかったことである。また松陰は攘夷について言及している箇所が，『留魂録』の中にあり，次のように述べている。

去年勅諚綸旨等の事一跌すと雖も，尊皇攘夷苟も已むべきに非ざれば，亦善術を設け前緒を継紹せずんばあるべからず。

松陰は，『留魂録』の中で断固として攘夷を主張している。松陰の攘夷に対する考え方は，終生変わっていなのである。

次に松陰の「雄略論」について考えてみよう。松陰は，安政六年に入江杉蔵宛てた手紙の中で尊攘堂，即ち朝廷が主宰する学校の創設を唱えている。つまり，「雄略論」実現に必要な有為な人材の育成を考えていた。

要するに，松陰の「雄略論」は，武力を行使し近隣国に進出する方策から交易により国力を増す方策へと変化している。しかし，松陰は一貫して攘夷を唱えている。方策が転換しただけで攘夷を放棄したわけではないのである。

まとめ

本論では，吉田松陰の経世論，つまりは「尊王攘夷」論について忠誠観と対外認識に着目し論じてきた。松陰の経世論とは，いかに西洋列強から日本の国體を守るかという論である。松陰の忠誠観や対外認識及び政策は，幾度も変化している。松陰の忠誠観は，潜在的に朝廷や幕府に忠誠を内包しながら藩に忠誠を尽くすという構造からはじまり，朝廷を頂点とし次に幕府，そして藩という構造を経て，朝廷と藩という忠誠観を形成する。そして最終的には，朝廷と天皇，藩と藩主毛利敬親を分離し，天皇を頂点に藩主毛利敬親を次に置き個人を中心とする忠誠観を形成するに至る。

一般的に松陰は，封建社会における身分秩序を否定したかのように考えられる。この要因は，松陰自身が仇討ちを果たそうとした被差別階層の宮守の顚末についての「討賊始末」を著したことや，松陰の弟子の高杉晋作が奇兵隊という身分を軽視した軍隊を作ったことが主な理由と考えられる。更に，「草莽崛起」論を主張し，野村和作宛ての手紙の中で松陰が「乍恐天朝も幕府吾藩モ入ラヌ只六尺ノ微軀が入用」と述べていることから，松陰が封建社会における身分制度を否定しているように見られている。しかし，松陰の天皇に対する忠誠と藩主毛利敬親に対する忠誠は終生変わっていない。ゆえに，「草莽崛起」論とは，松陰が最終的に至った忠誠観は，

天皇―藩主毛利敬親―草莽という位置関係の下で草莽が崛起すべきという主張であり，能力がある人間が天皇や藩主に取って代わって良いという論ではない。先行研究において松陰の忠誠観の変遷が問題とされ，更には，松陰が最終的にどのような尊王論を唱えるに至ったかが問題とされている。しかし，本稿で述べたように，松陰の最終的な忠誠観は，天皇―藩主毛利敬親―草莽という位置関係であり，朝廷―幕府―諸藩の構造の水戸学的勤王論でもなければ，天皇―臣民といった国学的勤王論でもない。天皇―藩主毛利敬親―草莽という忠誠観は，松陰，独自のものであり，水戸学や国学に分類することはできない。

次に，松陰の対外認識及び政策について，先行研究では，松陰の攘夷論の根拠を，華夷秩序による名分論に求めるものと，西洋列強を脅威として認識し，日本の独立を守るためとに分かれる。松陰は，「今墨夷は相を置き市を縦にせんと欲す。蓋し相を置くは，吾が國を馭する所以なり。」と述べて，西洋列強を現実の脅威として認識している。しかし，名分論では，宇都宮默霖との文通で尊王と攘夷の本末を悟ったとし，尊王が本であり攘夷が末であるとしている。つまり，宇都宮默霖との文通以前の本末を悟る前は，現実の脅威として西洋列強を認識していたが，本末を悟り，天皇が攘夷を望んでいることが，松陰の攘夷の理由となる。つまり，松陰が攘夷を主張している理由は，西洋列強を脅威と認識し，更には尊王と攘夷の本末を悟り，天皇が攘夷を望んでいることが松陰の攘夷論の根拠となっているのである。攘夷を行うために，西洋列強の技術を学ぶ必要があり，西洋列強に若者を派遣することや技術を学ぶ学校の創建を提言するようになる。ゆえに松陰の攘夷とは，単純な夷狄の排除ではなく，西洋列強から支配されず，日本の独立を維持することを意味していると考えられる。

（たけいし　とものり・言語文学専攻）

注

吉田松陰の著述からの引用は，岩波書店の『吉田松陰全集』（昭和九年版）に拠る。

『弘道館記』『退食間話』の引用は，今井宇三郎・瀬谷義彦・尾藤正英校注『水戸学』（岩波書店，一九七六年）に拠る。

注一　本郷隆盛　編著『近世思想論』の「幕末思想論 ── 吉田松陰の思想を中心に ──」三百六十九頁を参照。

注二　高橋文博　著『吉田松陰』の二百三十頁を参照。

注三　海原徹　著『吉田松陰　身はたとひ武蔵の野辺に』の百三十五頁を参照。

注四　桐原健真　著『吉田松陰の思想と行動　幕末日本における自他認識の転回』の「第一章　吉田松陰における思想上の「転回」── 水戸学から国学」百七十三頁を参照。

注五　郭連友　著　源了圓・厳紹璗編『思想』の「日本における孟子受容と吉田松陰の「革命思想」」の三百七十七頁を参照。

注六　海原徹　著『吉田松陰　身はたとひ武蔵の野辺に』の百二十二頁を参照。

注七　桐原健真　著『吉田松陰の思想と行動　幕末日本における自他認識の転回』の「第一部　幕末維

新期における「国際社会」認識の転回」四十八頁を参照。

注八　本郷隆盛　編著『近世思想論』の「幕末思想論 ── 吉田松陰の思想を中心に ──」三百三十二頁を参照。

注九　尾藤正英　著『岩波講座　日本歴史 13　近世 5 』の「尊王攘夷思想」五十頁を参照。

注十　尾藤正英　著『岩波講座　日本歴史 13　近世 5 』の「尊王攘夷思想」八十二頁を参照。

注十一　餘焔＝「近時歐夷日に盛んにして，東洋を侵蝕す。印度先に其の毒を蒙りて，満清継ぎて其の辱を受く。」を指しており，ここでは，西洋列強のアジア侵出の意図を指す。

注十二　崎[illegible]＝長崎。

注十三　河上徹太郎　著『吉田松陰　武と儒による人間像』の四十四頁を参照。

注十四　信夫清三郎　著『象山と松陰　開国と攘夷の論理』の二百六十八頁を参照。

参考文献

一．吉田常吉　藤田省三　西田太一郎　編『日本思想大系 54　吉田松陰』 岩波書店　一九七八

二．今井宇三郎　瀬谷義彦　尾藤正英　編『日本思想大系 53　水戸学』 岩波書店　一九七三

三．広瀬豐　著『吉田松陰の研究』 東京武蔵野書院　一九三〇

四．桐原健真　著『吉田松陰の思想と行動 ── 幕末日本における自他認識の転回』 東北大学出版会　二〇〇九

五．信夫清三郎　著『象山と松陰　開国と攘夷の論理』 河出書房新社　一九七五

六．藤田雄二　著『アジアにおける文明の対抗』 御茶ノ水書房　二〇〇一

七．奈良本辰也　著『吉田松陰のすべて』 新人物往来社　一九八四

八．近藤啓吾　著『吉田松陰と靖献遺言』 錦正社　二〇〇八

九．海原徹　著『吉田松陰　身はたとひ武蔵の野辺に』 ミネルヴァ書房　二〇〇三

十．奈良本辰也　著『武士の道』 Art Days　二〇〇二

十一．川口雅昭　著『吉田松陰』 致知出版社　2010

十二．奈良本辰也　編『日本の思想　吉田松陰集』 筑摩書房　一九六九

十三．奈良本辰也　著『吉田松陰』 岩波書店　一九五一

十四．高橋文博　著『吉田松陰』 清水書院　一九九八

十五．森田吉彦　著『兵学者吉田松陰　戦略・情報・文明』 ウェッジ　二〇一一

十六．河上徹太郎　著『吉田松陰　武と儒による人間像』 講談社　二〇〇九

十七．吉田松陰著，近藤啓吾全訳注『講孟箚記』上下巻，講談社　一九七九

十八．川上喜蔵　著『宇都宮黙霖・吉田松陰往復書簡』 錦正社　一九七二

十九．田中彰　著『吉田松陰　変転する人物像』 中央公論新社　二〇〇一

二十．廣瀬豐　編『吉田松陰書簡集』 岩波書店　一九三七

二十一．芳賀登　著『近代水戸学研究史』 教育出版センター　一九九六

二十二．奈良本辰也　編著『吉田松陰を語る』 大和書房　一九七四

二十三．西田知己　著「吉田松陰の尊王攘夷思想について」『上智史學』三十八號　一九九三

二十四．源了圓編　郭連友著「日本における孟子受容と吉田松陰の「革命思想」」『日中文化叢書［3］思想』 大修館書店　一九九五

二十五．尾藤正英　編著「尊王攘夷思想」『岩波講座　日本歴史 13　近世 5 』 岩波書店　一九七七

二十六．長富優　著「吉田松陰の忠誠論」『駒澤史學』二十號　一九七三

二十七．張惟綜　著「水戸学と吉田松陰」『哲学・思想論叢』二十六號　二〇〇八
二十八．張阿金　著「吉田松陰の死生観 ── 李卓吾の死生觀との比較」『中国哲学』三十五號　二〇〇八
二十九．洪偉民　著「日中における「忠孝観」の比較：吉田松陰の『講孟餘話』を中心に」『人文學論集』二十五號　二〇〇七